

八雲町議会議長 小林 信雄 様

産業建設常任委員会
委員長 井口 常義

産業建設常任委員会視察研修報告書

会議規則72条の規定により承認、許可を受けた研修視察について、下記のとおり行いましたので、その結果を報告いたします。

記

1 視察日 平成25年6月17日(月)～18日(火)

2 視察地及び視察調査項目

日 程	場 所	調 査 項 目
6月17日(月)	株式会社 夕張ツムラ 「生薬調整棟」 (夕張市沼ノ沢281番地)	町内で新たに取り組んでいる生薬栽培の効率化の研究や夕張農場の栽培状況、生薬の加工等
6月18日(火)	石狩湾漁業協同組合 「漁港朝市」 (石狩市厚田区7番地4)	朝水揚げの鮮魚類を組合員が直売する「漁港朝市」の運営方法や集客の魅力、体制づくり等

3 視察者名

	役職名	所属委員名	備 考
1	委員長	井口 常義	
2	委員	田中 裕	
3	委員	岡田 修明	
4	委員	安藤 辰行	

4 視察内容

閉会中の継続調査事項である「農業の振興」に関し、今年度より町内において新たに取り組んでいる生薬の栽培について、栽培効率化の研究状況、夕張農場における栽培状況、生薬の加工等についての説明を受け、委員会としての視野・見聞を広める。

また、「水産業の振興」調査事項関係については、当日朝に水揚げされた旬の鮮魚類を組合員が直売している「漁港朝市」について、その運営方法や集客の魅力、体制づくりなどの概要について視察研修を行い、今後の水産業の活性化を推進する方策を調査する。

◆株式会社夕張ツムラ「生薬調整棟」◆

初めに松葉取締役生薬栽培部長から株式会社ツムラの概要説明を受け、その後、工場内を見学した。

【工場概要】

現在、原料生薬の多くは中国で栽培されているが、需要の増加に伴い日本国内での栽培拡大を図る必要があることから、本州よりも低温でメリットがある北海道の全域で生産される生薬の調達、1次加工、選別及び生薬の保管を行うため、港のある苫小牧から比較的近い夕張市に「株式会社夕張ツムラ」を設立した。

敷地は約 30,000 m² で工場面積が 8,000 m²。工場の約半分は、1,000 t 規模の保管倉庫 3 つが占めており、今後、順次増設を予定している。



工場の主な作業は、収穫した生薬の乾燥と、乾燥生薬からの異物・不良品の取り除きの 2 つで、乾燥機は、2.5 t の原料を 1 日かけて生薬に乾燥させるものが 2 機と根物 400kg 又は葉物 100kg の原料を 2～3 日かけて生薬に乾燥させるものが 22 機ある。

【道内の生薬栽培の状況】

- ・センキュウ…道内での栽培が一番多い。既存の農業機械で応用がきくため、取り組みやすいが、生産増の予定はない。
- ・トウキ…訓子府町、芽室町、幕別町、網走市（契約農場あり）、由仁町で栽培。ハウスで育苗、外気温は 15℃位が良い（高すぎるとマイナス要因あり）。今後、道内での生産量を増やしたいと考えているが、北海道での栽培は始めたばかりでありうまくいっていない状況。新しい栽培方法など試行錯誤しながらやっていく。

◇質疑◇

Q今年度から当町の農家も取り組み始めたが生育状況が良くないと聞いている。

A春先に低温が続いたのも影響している。初めての取り組みなので、パソコンで画像を送ってもらう等の情報交換ができれば良かったが、対応がうまくいかなかった。

Q他の市町で、視察にいけるような所はあるか。

Aトウキについては、道内では今年から始めたところがほとんどであり、どこも 50 歩 100 歩という感じ。どんな方法が北海道に適しているかそれぞれの地域で工夫しながら取り組んでいる状況。

Q冷害など栽培に対しての保障はないのか。

A寒冷地の保障は、国、JA、会社ともに行っていないが、豊作の場合も含め全量を買取りするので、営農計画は立てやすいと思う。

Q生計を立てるには、どのくらい栽培する必要があるか。

A生薬栽培だけでご飯を食べられるとは思わない方が良い。閑散期の 10～11 月が収穫のタイミングであり、あくまで副収入という考え。



夕張ツムラ生薬調整棟前にて

Q今後の関わりについて。

A情報交換等がスムーズにいかなかった事が反省点であり、今後、各地域と情報共有して進めていく。

また、生育については、北海道においてどんな方法が適しているのか、会社でも研究段階であり、各地域の生産レベルの中で色々と試してもらえるとありがたいと考えている。

◆石狩湾漁業協同組合「漁港朝市」◆

石狩湾漁業協同組合の訪問前に厚田漁港で「厚田港朝市」を見学。朝6時30分から開催し、到着した9時半過ぎには品切れで既にシャッターを下ろしている店もあったが、開店している店舗では、捕れたての魚介類がとても安く販売されていた。



朝市入口の看板



17店舗が軒を連ねる



捕れたてを求め札幌などから客が来る



これで一皿300円



全て個々の漁家毎に行っている



ホタテの稚貝の販売

【石狩湾漁業協同組合】

上山副組合長理事から挨拶を頂いた後、和田専務理事より説明を受けた。

平成16年1月1日に石狩、厚田、浜益の3つの漁協が合併して石狩湾漁業協同組合が誕生し、石狩振興局管内で唯一の組合となった。年間の水揚げは平成16年に6,000tあったが、秋サケの減少が大きく、現在は4,400tにまで減少した。水揚げ高は18億円。現在、道の事業でニシンの稚魚を年間200万匹放流しており、水揚げが増えてきている。主要魚種は、ニシン、ホタテ、秋サケで水揚げの8割、金額で7割を占めている。漁家戸数は、合併時160戸あったが現在は高齢化により130戸まで減少。担い手育成が課題で行政とタイアップして進めていく。

【あつた港朝市】

4～50年前、作業場がなく、浜で網から外している魚を売ってほしいという人が訪れ、魚貝類を売っていたのが始まり。その後、保健所の指導により平成7年頃から運動会用のテントで、平成16年からはプレハブで販売を行い、平成18年から現在の場所で朝市を開催している。

開催期間は4月から10月までの毎日で、特に週末は朝早くから大勢の客で賑わい捕れたての魚介類はすぐに売り切れる。また、漁家それぞれの加工場で作ったイズシなどの加工品も販売している。全ての漁家が保健所の許可を取得しており、店舗にしているプレハブ（1店舗当たり百数十万円）も全て個人が所有している。漁で捕れた魚介類は、地元には仲買人がいないため札幌の卸売市場に出しているが、水揚げのうち市場と朝市に出す割合は、漁家個々の判断に任せている。朝市の売上の7%は組合に支払うことになっているが、売上は自主申告制。

朝市の売り上げは、原魚換算で6,000万円位、加工品のイズシが良く売れている。札幌から1時間半以内と地理的条件に恵まれており、5月の連休などは寄り道していく花見客も多く、「その日に揚がった魚を手に入れたい」というのが一番の付加価値（市場に出荷すると消費者に届くまで1～2日かかる。）。

大切なのは「自分の作ったものに自信を持つ」ということと、「買う側の立場に立ってみる」ということ。

【浜益ふるさと朝市】

平成6年に道の事業がきっかけで女性部が主体となって実施し定着してきた。

毎日の開催は保健所の許可が厳しいことから、4月から6月までの毎週日曜日のみ開催している。現在は、青年部が事業主体となって荷捌き施設内で開催しており、無料のパーベキューコーナーなども設置している。

◆委員会所感◆

原料生薬は、日本国内の漢方薬の販売量増加に伴い今後も需要の伸びが予想されている。また、漢方薬品メーカー大手のツムラでは、現在約80%を占める中国産の割合を減らして国内産の割合を増やす計画であり、国内の生産拠点として今回視察した夕張ツムラが新たに設立されている。夕張ツムラにおいても道内における生薬栽培を年間320トンから将来的に2000トンに拡大する目標であり、生薬栽培は専業とまではいかないものの、農地の有効利用や収入増への新たな取り組みとして可能性が感じられた。

道内ではこれまで「センキュウ」が中心に生産されていたが、夕張ツムラでは今後「トウキ」の生産量を増やしていきたい意向であり、町内においても十数戸の農家が今年から「トウキ」の栽培を始めている。

しかし「トウキ」については、北海道内での栽培を始めて間もなく、また気候の違いもあることから、本州と同様の栽培方法では生育しづらく、道内で栽培を行っている各市町では、それぞれ試行錯誤しながら地域に適した栽培方法を探っている状況であり、夕張ツムラとしても北海道に合った効率の良い栽培方法を研究している段階であった。

今後とも夕張ツムラと町、農家が情報共有をしっかりとし、お互いに信頼感を持ちながら事業を進めていくことが大切である。また、道内で「トウキ」を栽培している他市町との情報共有も必要だと思われる。

生薬栽培は、夕張ツムラでは全量買い取りの契約であり、各農家が意欲を持ち工夫しながら取り組むことで、今後伸びていく可能性が感じられる。新たな取り組みのため試行錯誤の部分も多いが、町のバックアップ体制を求めていくとともに委員会としても収穫後など定期的に状況を確認するなど、事業の進捗状況を見守っていく必要があると感じられた。

厚田の漁港朝市は、漁業者自らがどうしたら規格外の魚に価格を付けられるかという自分たちの生き残り策を自分たちで考え、保健所の許可を取得し、自前の加工場を作り、自前の店舗を作り、そして自分たちで商品を売るといふ、全て自らが努力して地域で頑張ってきた結果が、年間集客数2万人（4月～10月）の朝市になったものと思われる（札幌から1時間半の地理的メリットは大きい）。

八雲町の漁業を考えた場合、ホタテ養殖については、この数年は価格も安定しそうな見込みであるが、一部の若手漁業者からは、自分たちで安定的なものを作って販売していくことが将来的に必要なとの声も聞かれている。しかし厚田と違い八雲には仲買人がいて加工業者もあるため、漁家が新しい仕組みを作るといふ考えが出にくい状況にある。

まずは、漁家自らが少しでも自分たちの収入を増やすために何をしたらよいかを自ら考え、そして一歩前に動き出すことが必要である。

また、その仕組み作りの部分を提案したり、取り組みをバックアップできるよう、今後更に研究するとともに、委員会等でも町と議論をしていきたい。